

平成30年4月6日（金）

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

平成三十九年度 秋田県立本荘高等学校入学式 式辞

雄大にかまえる鳥海はその白銀の山容を春の陽光に一層輝かせ、雪解けの水をはらみながら悠然と流れる子吉川のせせらぎは春の訪れを告げます。悠久の時間へと循環する自然は、今年もまた希望に満ちた時節を巡らせました。

今日の佳き日に、

同窓会長 村岡 兼幸 様、

秋田県議会議員 加藤 鉦一 様 をはじめ、多くの御来賓の皆様と保護者の方々の御臨席を賜り、平成三十九年度秋田県立本荘高等学校入学式を挙行できますことを、心からお礼申し上げます。

ただ今、本校の入学を許可されました全日制課程240名、定時制課程8名の新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。

本校は、明治35年創立の旧制本荘中学校を前身とし、全日制と定時制を併せもち、定時制は今年度、創設70周年の節目を迎える伝統校です。文と武の両方を重んじる「右文尚武」、飾り気がなく、強く健やかな「質実剛健」、優れた者同士が切磋琢磨し人格を高め合う「玲瓏同氣」の三つを校訓とし、今日までに長い歴史と伝統が築かれてきました。

本校の教育方針は、全日制・定時制とも、「教育活動全体を通じて、未来を切り拓く人間力や社会に貢献する人材を育成する」、「キャリア教育の充実の下、志高く自ら自己実現を果たそうとする態度を育成する」の二つです。「未来」には、生徒一人一人の未来、ここ由利本荘市、にかほ市の未来、ふるさと秋田の未来、そして二十一世紀という未来、という意味が込められています。「自己実現」には、変化の激しいこれからの時代に主体的に向き合い、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となって欲しいという願いが込められています。

真っ暗な宇宙に浮かび、小さく輝く、青い球体……。そんな美しくも奇跡的な生命の星では、地球環境の悪化、資源の枯渇、宗教や民族間の対立など、地球規模の複雑な課題が山積する一方、人、モノ、資本が国境を越えて行き交うグローバル化が加速しています。また、人工知能による大量の個人情報「ビッグデータ」の分析、情報通信技術、ヒトゲノム編集など、科学技術が飛躍的な発達をとげ、二十一世紀は将来の予測が難しい時代とされています。

一方、本県の人口は、昨年、戦後初めて100万人の大台を割り込み、国立社会保障・人口問題研究所によれば、2045年の本県の人口は、60万1649人、県人口に占める15歳未満の割合や高齢化率はいずれも全国ワーストと推計されています。農業の複合型生産構造への転換、成長産業の育成、移住の促進など、これまで人口減への対応に向けた取組を図ってきましたが、一層実効性のある地方創生が喫緊の課題となっています。

そこで、これからの変化の激しい時代をよりよく生きていくために、本校に入学する皆さんに三つのことをお話します。

一つ目は、「生涯に渡って、主体的に学び続ける力を培って欲しい」ということです。

今、時代や社会の変化に柔軟に対応できる人材が必要とされています。知識を習得するだけでなく、課題解決能力のある人材が必要とされています。型を身に付け、身に付けた型を破り、新たな型を生み出す自己変革力が求められているのです。新たな自分を創り出

す勇気や挫折から立ちあがる強さが求められる時代に入ったとも言えます。そのためには、これからは、生涯に渡って志高く、主体的に学び続ける力が求められています。

二つ目は、「夢を育み、自己の可能性に挑戦することを大切にして欲しい」と思います。

アメリカ大リーグ・エンゼルスの大谷 翔平 選手は、アスレチック戦で投手デビューし、初勝利を挙げたインタビューで、「ずっと憧れてきたマウンドは、楽しかった」と素直な気持ちを口にしました。ポストティングシステムで移籍した大谷選手は25歳未満であるため、マイナー契約しか結ばず、年俵は最低保障額。しかし、自分の夢への挑戦を最優先にしました。北海道日本ハムファイターズ入団直後、懐疑的な意見を賞賛に変えてきた23歳の大谷選手は、大リーグでも1週間足らずで、初安打、初勝利、初本塁打を成し遂げます。最高峰のグラウンドで、これからも強い意志で、困難な二刀流に挑戦し続けます。

数学におけるノーベル賞といわれるフィールズ賞を受賞した数学者 広中 平祐 氏の著書『若い日本人のための12章』の中の、第七章「挑戦、そこに人生」で、「目標に向かって自分を駆りたてる熱く熱したものと、その行動に方向性と計画性を与える冷たく冷めたもの。情熱と理性のブレンドがチャレンジである。」とし、自己の可能性に挑戦することにこそ、人生を自ら創る神髄があることを述べています。

三つ目は、「失敗を恐れず、それを成長の糧にできる、やわらかな心を育て欲しい」ということです。

多感な高校時代は、新しい自分、自立した自分の確立のため、さまざまな困難に遭遇する時期です。青春期と悩みは、言わば同義語です。だからこそ、「やわらかな心」を大切にして欲しいと思います。やわらかな心とは、失敗から学ぶことができる心です。しなやかでへこたれない心です。好奇心旺盛にものごとに取り組み、失敗から学び、それを一つ一つ積み重ね、自分なりのやり方を確立し、自力をつけていく能力です。

この3月、国際アンデルセン賞作家賞に選ばれた 角野 栄子 さん(83)の作品は、一見かわいらしいお話であっても、どれもその根底に、人間の持つ強い情熱や生命力が色鮮やかに表現されています。登場人物は、ひときわ自立心が強く、大胆です。困難に出会っても、自己不信にとらわれることなく、対処法を見つけていく、心のやわらかさがあります。失敗や切なさも味わいますが、自分なりに工夫し、人と出会って成長する、心のやわらかさがあります。『魔女の宅急便』の主人公キキのように、どんな困難な状況でも諦めず、それを乗り越えるへこたれない「やわらかな心」を、ぜひ高校生活で培って欲しいと思います。

本校での高校生活では、全日制、定時制を問わず、「生涯に渡って、主体的に学び続ける力を養うこと」、「夢を育み、自己の可能性に挑戦すること」、「失敗を恐れず、それを成長の糧にできる、やわらかな心を育てること」、この三つをぜひ、大切にして欲しいと思います。

保護者の皆様におかれましては、これまでのさまざまな成長の過程を振り返った時、今日のお子様の晴れやかな姿に、感慨もひとしおのことと存じます。本当におめでとうございます。

子どもたちは、これから、自立の道を歩み始めます。自分で考え、自らの責任で行動するたくましい若者に育つことは、保護者の皆様と私たち教職員の共通の願いです。保護者の皆様と学校が力を合わせ、お子様の教育に全力を傾けて参りたいと考えております。本校の教育活動に対する御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

御臨席を賜りました御来賓の皆様には、これまでの本校への御支援に改めて感謝申し上げます。本校の教育活動の更なる充実と発展を目指して、教職員一同、誠心誠意、努力する覚悟でございます。今後とも、変わらぬ御支援と御協力をお願い申し上げます。

結びになりますが、新入生の皆さんが、今日の喜びを忘れず、心身とも健康で、充実した高校生活を送ることを心から期待して、式辞といたします。